

## キリシタン・カトリック村落のreligious cultural mentalityの研究

野村, 暢清

<https://doi.org/10.15017/2328708>

---

出版情報 : 哲學年報. 31, pp.1-36, 1972-03-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

野 村 暢 清

私は、地域的に宗教的なものを共有しているところ、即ち、西北九州のキリシタン・カトリック諸村落、出雲の憑物現象、東北、信州における山の信仰の三つを experimental field として使用しながら、宗教的文化的社会的統合の性格について研究を進めている。このそれぞれの宗教現象は、その背景として組織された社会を持ち、その意味づけ方、内調整、宗教的統合についても、それぞれの姿をもっている。これらの宗教現象は、そこでの生活に大きな影響を与えつつも、宗教的なものの在り方の姿と、その文化の中で宗教的なものの占める位置を異にしている。

一般的に宗教的文化的社会的統合の性格を考えることは、余り抽象的になるので、ここではキリシタン・カトリック村落におけるその姿の一断面、religious cultural mentality を中心に取り上げる。宗教は文化の中心に位置してその全体を色づけているものであるとの宗教の特徴に関する仮説を、更に正確にし、修正して行こうとしているのである。

宗教的なものが強く働いている宗教的文化的社会的統合において、宗教的なものは文化の諸断面で種々の強さの姿をもつらしいこと、また宗教的統合は anxiety とのかかわりをもつらしいこと、また frustration 場面で aggression を外にむける pattern の弱いらしいことをめぐって述べていく。宗教的文化集団が共有しているものの姿について、また、宗教集団を最も強く支えている人々の人格構造の特徴、宗教的集合表象の情緒的側

## 2 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

面の特徴などに言及していくことになる。

先づ、女子名の問題を取り扱い、次に宗教的統合が不安とのかかわりをもっているらしいこと、更に、frustration anxiety 場面で aggression を外にむける pattern の弱いらしいことに言及する。

### 1 女子名の問題について

この問題は、宗教的なものは宗教的文化的統合の諸文化断面に色々の影響を及ぼしているが、それぞれの断面で異つた色調の濃さを持ち、それぞれの変化の姿と、変化の時間的づれをもつこと、その syncretism についても、全体としての統合性をもちながらも、それぞれの文化断面でそれぞれの姿をもつことに関係する。これは集合表象、cultural mentality の持続、伝達の問題にも関係して来る。

この問題の研究は、黒崎における女子名が非常に特殊な姿をもっていたことに発する。ここでの女子名は二字の仮名名前である。男子の漢字を含む場合と異り整理が容易であること、またラテン系女子名、カトリックの女子霊名が a に終る特徴をもつことなどにより、キリシタン・カトリック的因子の存在を捉えうる可能性の存在なども、これを取り扱う所以である。

両隣の仏教村落三重及び神浦と対比してのキリシタン・カトリック村落黒崎、檜山の女子名の特徴については、既に哲学年報29輯に記述した。<sup>(註1)</sup>キリシタン・カトリック的因子のみが異なるので、その異りはキリシタン・カトリック的因子に基くと考えられる。そこでは、二字の無意味結合、即ちあき、きくなどの如く日本語としての意味をもたないもの。漢字化しえないものの多いこと、二字結合の後の字がア列に終るものが比較的多いことが顕著な特徴として取り出されている。ここでは、このような特徴が他地域のキリシタン・カトリックにもみられるかどうかということを捉えて行くとする。

この姿の展開には、キリシタン・カトリック村落におけるアリマの名、  
霊名、洗礼名が強くかかっていると私は考えている。その姿をパジュス  
から取りだすと次の如くである。

まりや またれいな るしや かたれいな いさべる まるた からら  
あんな もにか まりな あがた がらしや じゆりや

などである。これらは16, 17世紀キリシタンの場合の女子霊名であるが、  
その多くは今日の黒崎において保持されている。その殆どはaに終わってい  
る。これが女子俗名のここでの姿に関係して来たと考えるのである。

女子名に以上の如き特徴の存することの指適自体が興味深い結果である  
が、同時にそれはその文化が周辺文化から孤立して来た度合を示すもので  
ある。特定の集合表象の構成にこの孤立は必須でもある。

この宗教文化の境界線は16世紀における封建所領の姿を明確に示して  
いる。このことはフランスのカトリックの場合、アンシヤンレジームの司  
教区の境界線が現在の信仰強度にかかわる姿と同じである。この意味で宗  
教が非常に長い時間枠で動くものであることが考えられねばならない。

ここで取り扱っている名前は明治末(時には大正初期までを含む)まで生れ  
の女子名を戸籍から取り出したものである。その意味でこの名前がつけら  
れたのは時間的には現在を少しさかのぼる。しかし明治末までのこの地域  
の孤立度は強く、変化は少ないと考えられる。そこで宗教の機能を取り扱  
おうとする吾々の場合は、この時期を選ぶべきであると考え。大正、昭  
和の進むにつれて、日本で普通の名前が少しづつまじつて来る。この混入  
の度合が、この文化の普通化、一般化の速度の一つの指標でもある。孤立  
度の減少を示している。

文化の諸部分は変化の速度を異にする。宗教文化の諸断面は同時に変化  
していくものではないようである。ある文化断面は非常に早く変化し、あ  
る断面では強くかつての姿を保持する。シンクレティズムの度合も文化断  
面によつて異なる。この姿は名前の変化の時期と他の文化断面での変化の姿

#### 4 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

との比較を通してみられる。

次に、キリシタン・カトリック村落の若干の文化断面の姿を観察する。

通婚について、キリシタン・カトリック集団は宗教内婚的である。黒崎で吾々からみて同系統のものであるカトリックとキリシタンの間の通婚も殆んどない。これは前に記述した如くである。非キリシタン・カトリック系(註2)とキリシタン・カトリック系(註2)の間の通婚も勿論殆んどない。ここで取り扱う馬渡島の新村(カトリック部落)と本村(非カトリック部落)の場合も同様であり、五島中通島奈良尾町内諸部落の場合も同様である。奈良尾の場合、福見、浜串、高井旅、桐古里、大浦などのカトリック地域と岩瀬浦、奈良尾、小奈良尾などの非カトリック地域との通婚は、それらがキリシタン部落であった頃からづつと殆んどない。discrimination キリシタン蔑視の問題もあるが、宗教内婚が強く存して来ている。カトリックでは当然のことであるが、キリシタンの場合もこの文化断面は堅い。キリシタン・カトリック文化の内婚度は高い。この断面は現在も明確に持続している。キリシタンの場合は最近の出稼が急速にこれを崩す方向に働いている。しかしカトリックの場合内婚は持続する。この崩壊と共にキリシタンは喪失する。

土地所有の姿について、キリシタン・カトリック地域の土地所有の姿も周辺仏教村落とその姿を異にしている。その相続は黒崎の場合男子の均分である。従つて、その土地所有はその繰返しに基いて極度に細分化されたものとなり、しかもその所有は広範に分散的な形をとっている。二歩、三歩の土地が二、三十箇所(註3)に広範に散らばる形になる。中通島などでもカトリック系地域は仏教村落と異つて均分の形をとる。末子の形が多い。この土地所有の姿も現在に維持されている。原則はそのまま存しているが現在の出稼によつて乱されている。しかしその持続度は高い。現在の耕すだけ損という時代に土地は荒されているが、土地は親からのものとして売らない。

言語について、キリシタン・カトリック村落が他と異つたものを、オラシヨその他についてもつことは勿論であるが、セスタ、キンタの如き曜日、

洗礼名、更にはお水、抱き親（代父母）、ミサ、聖体、復活、ゼシン等をはじめ数多くの特殊の語を共有している。

このような方向と同時に、旧黒崎村の場合、その各部落が言語の pattern を異にする。上黒崎、下出津、西樫山等は大村領であり、下黒崎、上、中出津、東樫山は肥前深堀領である。各部落は複雑に両方に区分され、現在もアクセント、なまり、言葉を異にする。同じ大村領でも部落毎に異なる。このような姿は五島中通島の場合も同様である。同じ奈良尾町内でも、福見は大村領外海地域からの人々であり、奈良尾は和歌山からの人々を中心とする。大浦、桐などは富江領であり、岩瀬浦には五島の代官所があった。このような姿は現在にもそのままひびいて来ている。部落毎の異りの存在は isolation の度合を示している。そのような isolation のある処に宗教的集合表象が維持されて来たことも事実である。集合表象 cultural mentality の維持にとって必要な条件でもある。この言語の異りは cultural mentality の把持の姿を示しているものともいえよう。

キリシタン・カトリック村落は山羊の如き家畜の存在についても特徴的なものを示している。

周辺の仏教村落にはいないが、旧黒崎村及び樫山、大野などのキリシタン・カトリック地域には山羊がいる。人々は江戸期からこれを食べても来た。日本には本来は山羊はいない。江戸期の紀行文にも、「稲佐山のあたりに山羊をかうものあり」「浦上のあたりの道端に山羊のむれいる」と叙述されている。馬渡島新村にも山羊がおり、五島奈良尾の桐等にも山羊小屋がある。平島などでもキリシタン部落には山羊がいる。

二三の特徴だけにふれたが、このようにキリシタン・カトリック系村落の文化は種々の独自の文化特徴を保持している。その特徴のあるものは強く現在も残り、あるものは変化し、あるものは比較的簡単に消えていく。宗教文化の断面毎の変化の速度の異り、syncretism の姿の異りの様を示している。

## 6 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

このような諸文化特性の姿の中の一つとして、女子名の在り方を捉えていく。

先づ、五島中通島奈良尾町で、福見（カトリック部落）と小奈良尾（非カトリック部落）の対比を行い、更に馬渡島新村本村の対比を行う。表1表2は五島中通島奈良尾町の福見と小奈良尾の対比の姿を示している。表1が二字名前の後の字による整理であり、表2が前の字による整理である。種々の特徴がみられるが、ここでは、先に黒崎、檜山の場合に取り出された無意味結合の問題とア列に終るものに注目する。

表1は上からアイウエオ各列の対比がなされている。それぞれの上の欄がカトリック村落福見、下が非カトリック村落小奈良尾である。この整理では、みか、じわなどの同じ名が多数ある場合もこれを一つの形で示している。名前の頻度は略され、種類のみがあげられている。きか、みかが、 $\left. \begin{matrix} \text{き} \\ \text{み} \end{matrix} \right\} \text{か}$ の形で示され、その下の二つに分けられた数字の欄の上の方が、そこでの無意味結合の数を、下が有意味結合の数を示している。カトリック村落福見ア列〔カ〕で、 $\left. \begin{matrix} \text{き} \\ \text{み} \end{matrix} \right\} \text{か}$ がともに無意味結合であるので $\frac{2}{0}$ の形となり、非カトリック村落小奈良尾で $\left. \begin{matrix} \text{ち} \\ \text{た} \end{matrix} \right\} \text{か}$ がともに有意味結合として $-\frac{0}{2}$ の如き形になる。この各列毎の無意味結合と有意味結合の姿、 $\frac{\text{無意味結合}}{\text{有意味結合}}$ を右端の数字が示している。ア列についてはカトリック部落で $\frac{20}{7}$ に対して、非カトリック部落で $\frac{7}{11}$ 、イ列でも $\frac{20}{10}$ 、 $\frac{2}{15}$ の如くである。どの列をとってもカトリック部落に無意味結合の多い姿がみられる。なお、この傾向はここではア列イ列で特に顕著である。

このことは表3の馬渡島新村本村の後の字による整理の場合にも同様である。ここでも $\frac{\text{無意味結合}}{\text{有意味結合}}$ の姿は、ア列で新村(カトリック部落) $-\frac{11}{8}$ 、本村(非カトリック部落) $-\frac{1}{9}$ 、イ列で新村 $-\frac{20}{9}$ 、本村 $-\frac{7}{4}$ の如くであり、全体的にカトリック部落に無意味結合の多いことが捉えられる。

表 1 五島中通島奈良尾町福見（カトリック村落）F及び小奈良尾（非カトリック村落）Oの女子名の二字名前後の字による整理

	〔ア〕	〔カ〕	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ		
F	き}か み}	ふ}ま ま}	さ だ	さ だ	と こ す さ し や	な	は て す	す も は き さ の	と ち	ら	さ と に き つ	わ
	2	0	0	5		1	6	1	5			
	0	2	1	1		2	0	1	0			20 7
O	ち}か た}	よ}さ さ}	つ}た た}	は し か み	な	す は た て	ま	み つ ち	や	す ぞ に	わ	
	0	1	0	1		1	1		3			
	2	0	1	3		3	2		0			7 11
	〔イ〕	〔キ〕	〔シ〕	〔チ〕	〔ニ〕	〔ヒ〕	〔ミ〕	〔イ〕	〔リ〕	〔キ〕		
F	の せ と ず も	あ せ え う れ ふ	ま と き	た の よ	し ふ ま	ち	く に	ゆ き し す み		つ り		
	6	6	2	2	0		3		1		20	
	0	3	2	2	1		2		0		10	
O	弥 生	り か	よ し	い ち ふ ち	く に		た さ ゆ と き す	そ と 睡	み			
	0	0	0	0	0		2				2	
	1	3	1	2	1		7				15	
	〔ウ〕	〔ク〕	〔ス〕	〔ツ〕	〔ヌ〕	〔フ〕	〔ム〕	〔ユ〕	〔ル〕	〔リ〕		
F	ふ す さ	く	や を り	な り か は し づ	つ				は ま て	る		
	1	2	0						1		4	
	2	1	5						2		10	



8 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

O	ふゆきとせ く	まかや す	きたまみかは つ	てつ	つ て	る			
	0 5	0 3	0 7		0 3				$\frac{0}{18}$

F	[エ] きいかやすの え み	[ケ] よりまな み	[セ] もの せ	[テ] ふで	[ネ] そよ い み	[ヘ] ね	[メ] きと かし	[エ] め	[レ] は	[エ] は
	2 5		9 0	0 1	1 3		2 2		1 0	$\frac{15}{11}$

O	やとつみ ふやすとめ	みくすづ え	たし つすし	け げ	もとい み	せ	ひで ふい	ね	むとえ き	め	みふ き	る
	0 10		0 5		3 1		0 1	0 2		2 2		0 $\frac{5}{22}$

O	[オ] しお	[コ] よまは る	[ソ] いそ 子	[ト] い み も	[ノ] みしせ さひよ みやち	[ホ] の	[モ] しよ きじ	[ヨ] し みす ちせ つき	[ロ] よ	[ワ] な ぞ き	を		
	0 1	1 2	1 0	1 2	4 4		4 0	4 4		2 1	$\frac{17}{14}$		
	なし みさ	お	き あ 田 な さ せ つ 文 静 し げ 正 ち	き そ み み き	と	そ し げ つ	の	よ ほ	と も	じ き つ み ち き く	よ	ひ ろ せ な し	を
	0 3	1 10	1 0	1 1	1 2		1 0	0 1	2 4	0 1		1 2	$\frac{8}{24}$

表 2 五島中通島奈良尾町福見(カトリック部落) F及び小奈良尾(非カトリック部落) Oの女子名の二名前前の前の字による整理

	[ア]	[カ]	[サ]	[タ]	[ナ]	[ハ]	[マ]	[ヤ]	[ラ]	[ワ]
F あき		か { えつめ }	な { なきのやよわもくえだみ }	たし	な { つをせ }	は { るつまやゑる子 }	ま { るりさきちせ }	子 { 子 }	や { なえす }	
O あき子		か { きなつす }	な { くるめみまつえ子 }	た { かけまつみ子 }	な { をおつ子 }	は { なまつん }	ま { ま正子 }	つ { つす }	や { えすすえ }	弥生
F い	{ そえねと }	わ { わやめよかを }	し { おもよなみづちめ }	ち { らよのちせ }	にわ	ひの	み { かねよとせつさえ }		り { せえつ }	
O い	{ ねちせ }	く { くそみよくんく }	し { けおげなをげの子え }	ち { かよやえ子 }	にわ	ひ { ろで }	み { とよやきなねつせゑさきと }		りき	美代江

10 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

	[ウ]	[ク]	[ス]	[ツ]	[ヌ]	[フ]	[ム]	[ユ]	[ル]	[ウ]
F	うき	くに	す	つ		ふ		ゆみ		
			え よ やく みな まの すわ ずい	り よ わ		じ ゆ び び び で く				
O		くに	す	つ		ふ		むめ	ゆ	みく
			ま わ み げ	や よ る た げ み た さ え 子 の		く ち み え な 文 子				
F	えき		せ	て					れき	る
			い き の よ	る ま						す み
O			せ	て						
			を る 子	る ま つ						
F	お	こな	そ	と	の		も			をりす
			ね い を	な せ め わ き ら い	や し せ い		と せ や	よ	せ も ね し し の 子 の	
O			そ	と			も			ろん
			め み の わ	く も み め せ し め し え え み			せ ん	よ	し さ ほ 頼 子	

表 3 馬渡島新村(カトリック村落) S及び本村(非カトリック村落)

Hの女子名: 二字名前の後の字による整理

	[ア]	[カ]	[サ]	[タ]	[ナ]	[ハ]	[マ]	[ヤ]	[ラ]	[ワ]	
S		もに すな } か	わ きい ふ } さ		しな	みは	き い す は } ま	つや	とら	り み い } わ	
無意味結合数		2	3		0	1	3	0	0	2	$\frac{11}{8}$
有意義結合数		1	1		1	0	2	1	1	1	$\frac{8}{8}$
H		な た さ } か	ま ひ け } さ				は た し } ま	もや			
無意味結合数		0	0				0	1			$\frac{1}{9}$
有意義結合数		3	3				3	0			$\frac{9}{9}$
	[イ]	[キ]	[シ]	[チ]	[ニ]	[ヒ]	[ミ]	[イ]	[リ]	[キ]	
S	る も の て つ ち そ } い	ゑ み ま す } き	よ の と か } し	ま つ ま ふ } ち			も ふ た せ す え き } み		ゆ め と } り		
	7	3	2	3			4		1		$\frac{20}{9}$
	0	1	2	1			3		2		$\frac{9}{9}$
H	ぬ あ } い	ゆ み は え ち よ } き	ふ の } し	かち			なみ				
	0	4	2	1			0				$\frac{7}{4}$
	2	1	0	0			1				$\frac{4}{4}$
	[ウ]	[ク]	[ス]	[ツ]	[ヌ]	[フ]	[ム]	[ユ]	[ル]	[ウ]	
S	えう	と ふ き つ す } く	ま ゑ ゆ } す	み せ は ま て } つ					て は つ } る		
	1	2	3	0					0		$\frac{6}{11}$
	0	3	0	5					3		$\frac{11}{11}$
H		りく	ます	せつ					てる		
		1	1	0					0		$\frac{2}{2}$
		0	0	1					1		$\frac{2}{2}$



表 4 馬渡島新村(カトリック村落) S及び本村(非カトリック村落)  
Hの女子名の二字名前の前の字による整理

	[ア]	[カ]	[サ]	[タ]	[ナ]	[ハ]	[マ]	[ヤ]	[ラ]	[ワ]
S	あ { あ の	か { せ し よ	の { と も み	た { せ み け	な { か つ を	は { き つ つ の る ま	ま { つ つ ん す ち き り せ る え	やの		わき
H	あ { い ま	かち	さ { か の か え	た { せ か み ま	なか	は { る こ よ ま き	ま { す さ の	やお		
	[イ]	[キ]	[シ]	[チ]	[ニ]	[ヒ]	[ミ]	[イ]	[リ]	[キ]
S	い { ね ま と と な わ	の { ま お ん ち の よ	し { お ま づ め を げ の な	ち { い よ え			み { は わ つ ま と つ え			り { わ の せ そ え
H	い { そ の と	まよ	し { づ ま げ	ち { よ よ ま を		ひ { ろ さ き こ	みき		りく	
	[ウ]	[ク]	[ス]	[ツ]	[ヌ]	[フ]	[ム]	[ユ]	[ル]	[ウ]
S	うよ		す { ぐ ま か み	つ { い る ぐ や ち ね よ		ふ { さ い く み く じ ち		ゆ { り す き え	る { せ い	
H			す { い え の		ふし			ゆき		
	[エ]	[ケ]	[セ]	[テ]	[ネ]	[ヘ]	[メ]	[エ]	[レ]	[エ]
S	え { み を の よ		せ { つ み	て { る よ つ い			めり			る { ま す
H		けさ	せ { の つ	てる						

14 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

	[オ]	[コ]	[ソ]	[ト]	[ノ]	[ホ]	[モ]	[ヨ]	[ロ]	[ヲ]
S	この	そ	{う い	{く ら り も め し え	の {い し		も {に か い み	よ {し せ		
H				と {め よ	のし		も {せ や と	よせ		

このようにカトリック部落では無意味結合の姿は顕著に多いようであるが、次に第二の特徴であったア列の問題はどうであろうか。

ここでは、ア列が多いという形でなく、ア列の無意味結合が多いという形で問題になって来る。先にみた如く無意味結合の多さがキリシタンカトリック村落で顕著なのは、各列の中でア列イ列である。そして馬渡、奈良尾の両方で特に顕著なのはア列においてである。イ列の場合には両者ともで〔イ〕の場合に $\frac{6}{0}$ 、 $\frac{7}{0}$ とはげしい無意味結合の多さの形をだし、これが全体に強くひびいている。処でア列の場合にはア列全体にわたってカトリック部落での無意味結合の多さの姿がみられる。奈良尾町福見の場合には〔カ〕〔ナ〕〔ヤ〕〔ワ〕ではげしく、馬渡島新村の場合には〔カ〕〔サ〕〔マ〕〔ワ〕でみられる。更に、先に観察した黒崎、檜山の場合も同様で、ア列の無意味結合が非カトリックの隣接地域三重、神浦より多いことは哲学年報29輯(註4)の表でも明かである。

この結果よりして、キリシタンカトリック村落の女子名に、各列の中でア列に関して、無意味結合の多さが、特に顕著であることがみられる。

このことは先に黒崎についてア列の多さを取り出した場合、同様のことを意味していた。それはたか、なか、たまなどのア列の有意味結合の多さでなく、わさ、いさ、りわ、もや、みかななどの如きア列の無意味結合の多さを意味していた。日本語ではア列に終る女子名は少い。ア列の多さは無意味結合的なア列に終るものの増加につれてふえることになるのである。

このように一般的に無意味結合の多いこと、またア列に終る無意味結合の多いことは西欧的因子の影響、特にアリマの名、霊名、聖者名の影響のもとづくものと私は考えている。現在の流行名での西欧的な感じもこのア列の無意味結合の形で表現されていることはだれでもが容易に理解しうるところである。

文化二年天草高浜村異名覚帳にみられる 105 名の女子の霊名はすべてまりやである。アリマの名はここではマリヤー一つになってしまっている。抱き親の名をとるので一度こうなるともう変わりえない。このような場合にはこのア列が多くなる pattern は充分には働きえないと考えている。

福見及び新村は現在カトリックであるが、これらがカトリックになったのは明治になってからであり、これが明治末まで生れの人々の名前の対比であることなどを考え、またその名前の伝達の姿は福江島南河原の老婆さもの場合その姪にさもがありその直孫にさも子がある如き形で伝達されることをみるにつけても、これらの名がキリシタン・カトリックの伝統の中で構成されていることを考えるのである。

## 2

宗教的統合が anxiety とのかかわりの断面をもつらしいこと、また aggression を外にむける pattern の弱いらしいことについて。

先の女子名に関するものが宗教文化の比較的外周にかかわる問題であるのに対して、この anxiety と aggression の方向の問題は宗教文化のより中心的なものに関係する。

これは地域的宗教集団が共有している一つの情緒的断面、宗教的な集団表象の情緒的な側面の研究の一つでもある。宗教集団を最も強く支えている人々の人格構造の特徴にかかわる問題である。

地域的宗教集団を支える人々について種々の考え方を取ることが出来る。宗教的集団組織の役割り区分に重点を置いて捉えることも出来る。事実キ



リシタン集団の場合、集団構成員は同じ信仰的感情や思考や傾向性をいだきながらも、帳方、水方などの役職者の死亡や親族構造が、その集団の崩壊や衰弱を来すことも事実である。したがって、この方向の役割りが、ある意味で地域の宗教を支えるものであることも事実ではある。帳方の宗教的人格、血縁親族の在り方が大きな力をもっている場合もある。Radin の *truly religious person*, *intermittently religious man*, *indifferently religious individual* の如き区分を入れて宗教を支える人々を考えることも必要である。Redfield の宗教的 *great tradition* によりつながるものと *folk way* の考え方を、入れて地域集団の宗教の姿を考えていくことも必要であり、重要である。

キリシタンとカトリックの共存する黒崎において、両集団を *great tradition* としてのカトリシズムに関係づけて分析していくことも可能である。神父Kは *great tradition* の中に強くあり、教え方であるHも比較的多くの文化断面でこの中にある。T. M. K. S. はこれに比較的にかかわり、その他の多くの人々は農村的なものをより多く含む。キリシタン集団ははるかに遠い時代に *great tradition* から分離した形をとっているが、それは *great tradition* の若干の文化断面を保持して来ている。帳方Mの如き *great tradition* の側のものを比較的多く含んでいる。全体としてはキリシタンの人々は宗教的断面で農村的因子をより強く含んでいる。

宗教集団を支える人々をこのような種々の形で捉えていくことが可能ではある。

しかし、本論文では、文化の美的断面を支えていくのに、美的タレントをもつ人々があるように、宗教的断面を支えていくのに宗教的なものと *consistent* なものをより強くもつ人々があるだろうとの分析断面をとる。そのような人々がどのような人格特徴をもっているかという点にかかわっていく。

この問題も種々の行き方で捉えられるが、ここでは黒崎中学三年の M-MPI の結果を中心資料として取り扱う。キリシタン部落はその伝統的な

ものとして、調べられることへの拒否性をもつ。中学生以外の部分でテスト風の資料を量的に集めることはむづかしい。48名の550の項目への yes, no, 分らないの反応の分析である。調査意図を感じさせない為に、学校のテストの形で行ってもらった。既成のテストの使用は他の調査との結果比較の可能性と調査意図をかくす為でもある。テスト自身がカトリックをねらっていないので牧師、聖書のごとき適当でない表現も含まれている。しかしその分析は私の行き方で行われている。

先づ私の選定した宗教項目(19項目)及び宗教関係項目(19項目)への反応の姿によつて、人々を宗教度、キリスト教度について測定する。被験者である生徒はキリシタン・カトリック村落旧黒崎村全体に分布しているが、宗教度0のものは二名のみである。宗教項目は表5の如くである。

先づ宗教度測定の結果にもとづいて、人々を宗教度強から弱に順にならべる。次に宗教強度にしたがって group 分けする。宗教強から最も強い12名を宗教 $^+$ <sub>+</sub>group に区分し、弱い側から9名をとって宗教 $^-$ group と区分する。次にこれらを含む強の側からの20名、弱の側から20名の group を宗教 $^+$ group 宗教 $^-$ group とする。表5は宗教項目への各 group の姿を示している。宗教 $^+$ と宗教 $^-$ を対比し、宗教 $^+$ と宗教 $^-$ を対比していく。宗教 $^+$ <sub>+</sub>+- $^-$ の group が構成される。斜め右下の小字は分らないとしたものの%であるが、否定ではないという意味で意味をもつ。宗教 $^+$ <sub>+</sub>group は神はあるとするもの100%、来世はあるとするもの75%、毎週何回も神様にお祈りするもの42%であり、宗教 $^-$ はこれらについてすべて0%の group である。宗教 $^+$ では上述の各項は60%、45%、35%、宗教 $^-$ は0%、5%、0%の形をとる。

表6はこれらの各 group 毎の MMPI の普通の分析結果を示したものである。各 group の各項目別の反応粗数の平均値を示している。LFK はテストの信頼度にかかわるが、適当に答えられている数値を示している。Hs

18 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

表 5

宗 教 項 目		+	-	+	-
		+	-	+	-
1 <sub>27</sub>	私は時々悪魔に取りつかれます	58 <sub>17</sub>	0 <sub>66</sub>	45 <sub>15</sub>	15 <sub>30</sub>
2 <sub>28</sub>	牧師または祈とう師等はお祈りしたり信者の頭に手を当てたりして病気を直すことができます	0 <sub>8</sub>	0 <sub>11</sub>	0 <sub>15</sub>	0 <sub>6</sub>
2 <sub>28</sub>	世の中のことは、すべて聖書の予言者たちの予言どおりに変わりつつあります	8 <sub>67</sub>	0 <sub>66</sub>	10 <sub>60</sub>	0 <sub>75</sub>
4 <sub>8</sub>	私はたいてい日を決めて教会に行きます	33 <sub>8</sub>	0	35 <sub>15</sub>	0
4 <sub>8</sub>	キリストは復活すると思います	25 <sub>8</sub>	0 <sub>11</sub>	20 <sub>20</sub>	0 <sub>15</sub>
4 <sub>26</sub>	来世（死後の世界）はあると思います	75 <sub>8</sub>	0	45 <sub>35</sub>	5 <sub>15</sub>
7 <sub>22</sub>	私は罪深い人間だと思います	17 <sub>17</sub>	0 <sub>22</sub>	15 <sub>20</sub>	10 <sub>35</sub>
7 <sub>26</sub>	私はたいていの人よりも信心深い	42 <sub>17</sub>	0	25 <sub>30</sub>	5 <sub>6</sub>
9 <sub>9</sub>	あの世には悪魔もいるし、地獄もあると思います	25 <sub>17</sub>	0	20 <sub>40</sub>	5 <sub>15</sub>
9 <sub>18</sub>	私は神様はあると思います	100	0	60 <sub>35</sub>	0
14 <sub>30</sub>	私は非常に変わった宗教体験をしたことがあります	0	0	0	0 <sub>5</sub>
15 <sub>7</sub>	ほんとうの宗教はただ一つだけだと思います	50 <sub>17</sub>	11	45 <sub>25</sub>	20 <sub>35</sub>
15 <sub>28</sub>	宗教は私に悩みを支えません	33 <sub>25</sub>	11	30 <sub>40</sub>	10 <sub>5</sub>
16 <sub>14</sub>	私は一度も幻影を見たことはありません			100	100
16 <sub>26</sub>	私は神の特別なお使いです	0	0	0	0 <sub>10</sub>
17 <sub>8</sub>	毎週何回も神様にお祈りします	42	0	35 <sub>5</sub>	0
17 <sub>10</sub>	一週に何回も聖書を熱心によみます	0	0	0 <sub>15</sub>	0
17 <sub>11</sub>	ほんとうの宗教はただ一つだけだと信じこんでいる人にはどうにもやりきれません	17 <sub>68</sub>	33 <sub>44</sub>	20 <sub>65</sub>	30 <sub>60</sub>
17 <sub>3</sub>	キリストは水を酒に変えるような奇跡をあらわしました	8 <sub>8</sub>	0	5 <sub>15</sub>	0 <sub>5</sub>

は hypochondriasis scale 健康への心配の方向を, Dは depression scale 抑鬱的傾向を, Hy は hysteria scale を, Pd は psychopathic deviate scale, Pa は paranoia scale 偏執性の方向を, Pt は psychoasthenia scale 精神衰弱の方向を, Sc は schizophrenia scale 分裂病的方向を, Ma は hypomania scale 軽躁性の方向を, Si が社会向性マイナ

表 6

	L	F	K	Hs	D	Hy	Pd	Pa	Pt	Sc	Ma
++	4.0	7.33	9.0	8.75	23.16	19.41	15.33	11.25	20.33	19.66	15.16
+	3.65	7.2	8.75	7.4	21.4	18.3	15.35	10.25	18.6	18.6	14
-	3.35	7.7	10.15	6.35	23.4	16.85	15.7	8.05	17.7	17.05	14.1
--	2.88	7.66	10.22	6.11	23.44	17.88	17.44	9.88	18.22	17.77	14.0
	Si	An	Ag	N							
++	28.91	14.83		12							
+	28.2	15.8		20							
-	29.9	12.67		20							
--	30.22	12.38		9							

スの方向を, An は Anxiety の方向を捉えようとしている。

これらの諸傾向のうち, 普通, 相関的に変化するものがある。Pt は Hs D Hy と相関し, Pt と Sc も強く関係する。ここでの宗教強の宗教弱からの異りの姿も大体そのような姿を示している。Hs について, 宗教<sup>+</sup> group は粗数の平均8.75, 宗教+が7.4, 宗教-が6.35, 宗教<sup>-</sup>が6.11であり, Hy については, <sup>+</sup>が19.41, +が18.3, -が16.85, <sup>-</sup>が 17.88, Pt は <sup>+</sup>が20.33, +が18.6, -が17.7, <sup>-</sup>が18.22, Sc は<sup>+</sup>19.66, +が18.6, -が17.05, <sup>-</sup>が17.77である。概して宗教強の方向に動くにつれてこれらの度合はたかまっている。この逆の形, 宗教強で低まる形は Pd と Si にみられるが, Pd の増加は社会的規範への反対, 反道徳の方向にかかわっているのが宗教者の場合当然である。Si の場合, この姿は社会向性+を示している。<sup>+</sup>と<sup>-</sup>, +と-の対比が中心である。

ともかく, 宗教強の方向の人々は Hs Hy Pt Sc 等の方向にも高い姿を示している。これは宗教強が一般の平均よりこれらについて高いということ

とではない。宗教弱と比較して高いということである。+ + - - と順次の形を示していることが望ましいが、充分にはいえない。しかし概していつて、宗教強は Hs Hy Pt Sc について高い方向をもっていることはいつてよいと思う。

そこで、ここで私の主張したいのは、比較的類似した条件をもつものの中で、宗教強は宗教弱より所謂神経質への全般的方向をもっているということである。

次に、私の選択した47の項目から anxiety の姿を、22の項目から社会性の度合を取り出してみる。表7が anxiety への関係項目として選択されたものであり、それへの+と-、+と-の対比の姿を yes としたものの%で示している。その右側の+-は、宗教強 group が宗教弱 group に比してその項目で anxiety について+の方向か-の方向かを示している。anxiety 度は47の項目全体への姿から全体的数値として取り出されるものであるが、これらの諸項目各々での姿を通して、その姿は、より操作的に充分に、より内容を捉えながら、みられうる。各問題項目の左端にある $1_3$ の如き数字で各項目を示すが、それは問題用紙19頁の中の1頁の3番目の項目であることを示している。表7で、宗教強は $8_7, 12_7, 12_8, 12_{21}, 12_{22}, 12_{24}, 12_{28}, 14_4, 14_{10}$ などで特に顕著に、また $2_1, 2_{13}, 3_{16}, 4_{20}, 7_9, 12_{13}, 12_{27}, 13_5, 14_{10}, 15_5, 15_{22}, 17_9, 19_5$ などでも anxiety の強い方向を示している。宗教+宗教+の人々は何かにつけてよく心配する方で、ほとんどいつもくよくよ心配し、自分がしなくてもよい心配までし、自分に害がないとわかっているものでもこわがり、小刀などよく切れるものや先のとがったものを使うのはこわがり、眠りがとぎれがちで、心配でねむれないことがあり、よく夢をみ、悪夢でうなされもする方向の人々である。 $1_3, 1_8, 3_{13}, 5_{22}$ の如きにみられる anxiety -の方向のものは、普通 anxiety を強く示す人々にはみられないものであるが、宗教者にこの面が含まれていることは、宗教者の人格構造に関する他の研究でもみられる処である。

表 7

Anxiety		+	-	+	-	
		+	-	+	-	
1 <sub>3</sub>	朝私はたいていすがすがしく、よく休まった気持ちで目をさまします	25	0	15	10	-
1 <sub>8</sub>	私の日常生活は興味のあることでいっぱいです	50	11	45	20	-
1 <sub>20</sub>	気分がよくなないと、気むづかしくなることがあります	75	67	70	60	+
1 <sub>21</sub>	時々たまらなく家出したくなることがあります	25	67	25	40	-
1 <sub>24</sub>	誰も私を理解してくれないように思います	8	33	25	25	
2 <sub>1</sub>	2, 3日に一度は悪夢でうなされる	25	0	20	5	+
2 <sub>2</sub>	一つの仕事に打込むことはなかなかできません	33	11	30	20	+
2 <sub>13</sub>	眠りがとぎれがちでよく眠れません	17	0	10	5	+
3 <sub>1</sub>	私は今まで正しい生き方をしてはおりません	42	22	40	35	+
3 <sub>7</sub>	自分はほかの人のように、幸福だったらなあと思います	33	67	25	50	-
3 <sub>13</sub>	私は重要な人物です	17	0	10	0	-
3 <sub>16</sub>	私はいつも憂うつです	17	0	10	0	+
3 <sub>26</sub>	私はたしかに自信に欠けています	50	44	35	70	-
4 <sub>15</sub>	魂が抜けたような気がすることがあります	17	11	15	15	
4 <sub>16</sub>	何かまचाがったり悪いことをしたような気持ちになることがよくあります	67	89	60	80	-
4 <sub>20</sub>	私は誰かにきらわれております	58	44	50	35	+
5 <sub>1</sub>	私は人から何か悪だくみされていると思います	8	0	5	0	+
5 <sub>3</sub>	私は人からあとをつけられていると思います	0	0	5	0	+
5 <sub>22</sub>	自分は役に立たない人間だと思うことが時々あります	67	89	60	80	-
6 <sub>2</sub>	夜はたいてい心配なこともなくすぐ眠ってしまいます	83	89	75	80	+
6 <sub>20</sub>	私は人からどう思われようとも気にしません	58	44	45	45	
7 <sub>2</sub>	気が狂いはしないかと心配です	25	0	15	15	
7 <sub>20</sub>	私の考えや思いつきを盗もうとする人がいます	0	0	10	0	+
7 <sub>9</sub>	いつもからだじゅうが弱っているような気がします	50	33	35	25	+

22 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

8 <sub>1</sub>	昼間は眠れますが夜は眠れません	0	0	0	10	-
8 <sub>7</sub>	何かにつけてよく心配するほうです	92	67	85	55	+
8 <sub>28</sub>	じっとすわっておられないくらい、気持ちがさっぱり 落ち着かないことがあります	67	87	60	70	
12 <sub>7</sub>	ほとんどいつも何かについて、くよくよ心配して います	67	11	45	20	+
12 <sub>8</sub>	私は自分がしなくてよい心配までします	42	11	45	15	+
12 <sub>13</sub>	私はいっもどんな小さなことでも、それをする前に じっと考えないではおられない方です	33	22	40	15	
12 <sub>2</sub>	ちょっとした旅行などで家を離れても、不安になり 気持ちが落ち着きません	42	22	45	35	+
12 <sub>22</sub>	私は自分に害がないとわかっている物でもこわがり ます	33	22	35	15	+
12 <sub>27</sub>	自分の能力の足りなさを考えて、仕事をあきらめた ことが何度あります	83	44	75	60	+
12 <sub>24</sub>	小刀などよく切れるものや先のとがったものを使う のはこわい	58	11	55	30	+
12 <sub>28</sub>	悪い言葉や恐しい言葉が頭に浮んで来てはらいのけ ることが出来ません	58	11	40	25	+
12 <sub>29</sub>	頭にうかんでくるつまらない考えに、何日も悩ま されることが時々あります	25	33	15	25	-
12 <sub>30</sub>	ほとんど毎日のように私をおびやかすことが起っ ています	8	11	20	10	+
13 <sub>5</sub>	屋内に居ると不安になります	17	0	10	0	+
14 <sub>4</sub>	私はよく人に相談します	58	33	70	20	+
14 <sub>10</sub>	憂うつになることはめったにありません	50	78	50	80	+
15 <sub>5</sub>	私はよく夢をみます	58	22	55	25	+
15 <sub>11</sub>	何か不幸なことが起りはしないかと少々心配です	42	67	60	60	
15 <sub>22</sub>	心配で眠れないことがありました	42	22	45	35	+
17 <sub>9</sub>	悲しみや心配事にこだわりがちな人たちには同情し ます	75	33	65	40	
17 <sub>19</sub>	ほんとうは何でもないことを必要以上に心配するこ とが時々あります	50	44	60	50	+
19 <sub>3</sub>	週に数回何か恐しいことが今にも起りそうな気がし ます	8	11	10	10	
19 <sub>5</sub>	時々同じ夢を何度もくり返して見ます	17	0	20	5	+

(キリシタン村落での個々の項目への反応の姿、それ自身が非常に重要な資料的意味をもっている。)

以上の結果から、宗教強、宗教 $\frac{+}{+}$ 、宗教 $\frac{+}{-}$ は所謂神経質で心配性な方向をもっていたということが出来ると思う。

処で同時にこの宗教 $\frac{+}{+}$ 宗教 $\frac{+}{+}$ は非常に強く社会的な方向をもっている。表6の Si について、宗教強が宗教弱より低い方向をもっていることもそれを示しているが、その社会性への方向を22の関係項目への反応の形で示しているのが表8である。この場合も社会性の数値はこれらの全体への反応群から出されるが、ここでは諸項目への反応の姿で考えていく。その方が充分な理解がなされ得ると思うからである。強く社会的な方向を示している。2<sub>27</sub>4<sub>9</sub>5<sub>21</sub>11<sub>9</sub>11<sub>15</sub>13<sub>7</sub>17<sub>14</sub>などで+の方向がみられる。笑い楽しむようなパーティや寄り合いに出席するのが好きであり、クラブや集会に入りたい方で、周囲の人々の習慣に左右される方でもある。宗教強は宗教弱よりも人々とともにいることへの方向を強く示している。ここでは御誕生即ちクリスマス以後冬の間人々が集って会食する回数は非常に多い。しかし反応の中に孤独への傾向もみられる。この混在も宗教的人格に特徴的である。8<sub>26</sub>10<sub>16</sub>11<sub>26</sub>16<sub>4</sub>の如きにみられる。この特徴は宗教者の特徴として先に指摘した処でもある。とはいえここで社会的な方向は非常に強い。宗教は強く社会的因子として受取られていると考えられる。

宗教強の人々は、神経質で心配性であるとともに、強い社会性を、ともにいることへの方向を、もっているのである。

宗教内婚、親族の協力などを考えると、親族や家族へのかかわりに関する項目でも強いと考えられるが、ここでは若干奇妙な姿が示されている。

この方向を表9の21項目を通して考える。宗教 $\frac{+}{+}$ と宗教 $\frac{-}{-}$ の対比では+の姿が出ているが、宗教 $\frac{+}{+}$ と宗教 $\frac{-}{-}$ の対比では逆の形が出ている。+の関係の出ているものは少い。「父はよい人でした。」「父を愛していました」「家庭は人並にたのしい」などに-の形がでている。このことはカトリックの非行の多さに関する中学の教諭Mの家庭が原因とする解釈などもかかわるものをもっているかも知れない。この結果も先の不安とぶつかって



表 8

	社 会 性	+		-	
		+	-	+	-
2 <sub>27</sub>	私はつきあいはいいほうです	75	44	+	55 50
4 <sub>9</sub>	大騒ぎして笑い楽しむようなパーティや寄合いに出席するのが好きです	83	67	+	75 65 +
5 <sub>21</sub>	私の行動は周囲の人たちの習慣に左右されていることが多い	58	33	+	55 56
5 <sub>23</sub>	私は子供のころお互いのためなら何でもやるくらいに固く団結した仲間のひとりでした	42	22	+	30 25
8 <sub>19</sub>	いろいろのクラブや集会にはいりたいものです	67	44	+	65 40 +
9 <sub>14</sub>	お互いに冗談をいえる人たちとっしょにいるのが好きです	92	100		95 100
11 <sub>2</sub>	パーティとか社会的な集まりが好きです	75	67	+	65 65
11 <sub>9</sub>	私は人並に友だちがすぐできると思います	75	56	+	65 60
11 <sub>15</sub>	汽車やバスなどで知らない人に話しかけることがよくあります	33	0	+	25 0 +
11 <sub>23</sub>	知らない人に会うのは苦になりません	83	67	+	60 60
12 <sub>23</sub>	人がいっぱい集って話している部屋にひとりではいってゆくのに気おくれしません	25	0	+	20 0 +
13 <sub>6</sub>	元気な友達の中にはいると自分の悩みは消えてなくなるようです	75	67	+	70 75
13 <sub>7</sub>	群集の興奮しているふんい気が好きです	50	33	+	45 35 +
13 <sub>8</sub>	ほかの人たちとっしょにいられるので社交的な集りが好きです	75	78		80 65 +
13 <sub>10</sub>	おもしろい話だとほかの人にも話してやろうと思って覚えておこうとします	83	79		85 85
13 <sub>11</sub>	人並み以上に人前を気にするはにかみ屋ではありません	75	44	+	70 55 +
17 <sub>14</sub>	便所や小さな閉めきった所にひとりでいるのはこわい	75	22	+	70 35 +
8 <sub>26</sub>	だまって考えこむ方です	75	56		60 45
10 <sub>16</sub>	自分ひとりでいる時ほど幸福なことはありません	17	11		15 10
11 <sub>26</sub>	できるだけ人ごみの中にはいらないようにしています	67	33		45 25
13 <sub>17</sub>	パーティなどでは皆とっしょになっているよりも、自分ひとりか、ひとりの人とだけいる方です	25	11		25 15
16 <sub>4</sub>	森や山の中の小屋にたったひとりでも、けっこう幸福に暮らすことが出来ると思います	17	0		10 0

(各項目にこのような姿を示していること自体が、現在の時点でのキリスタンカトリック村落の姿として貴重な意味をもっている。)

表 9

家族親族へのかかわり		+		-	
		+	-	+	-
1 <sub>17</sub>	父はよい人でした	100	89	+	70 75
1 <sub>21</sub>	時々たまらなく家出したくなることがあります	25	67	+	25 40
3 <sub>26</sub>	父を愛していました	67	56	+	40 45
4 <sub>6</sub>	家の人たちとけんかすることは殆んどありません	33	33		45 60
5 <sub>17</sub>	私の家庭は人並に楽しいほうだと思います	83	78		65 80 -
6 <sub>17</sub>	家の人が法律にふれてゴタゴタを起してもそんなに気に病むようなことはありません				5 5
6 <sub>27</sub>	母は良い人でした	100	89	+	90 85
8 <sub>6</sub>	私の家庭はよそにくらべては互の愛情や親密さにかなり欠けているほうです	17	22		20 15
8 <sub>10</sub>	母を愛しました	75	56	+	60 60
8 <sub>14</sub>	両親は私の友だちつきあいによく反対しました	25	26		25 10
8 <sub>26</sub>	私は家庭のしきたりに関係なく自由に暮しています	42	11	+	30 30
8 <sub>27</sub>	親類の人達はほとんど皆私に親しみをもっています	58	44	+	45 55
9 <sub>6</sub>	両親や家族たちは、必要以上に私の欠点をとがめだてします	8	11		15 20
9 <sub>7</sub>	私は理由があつて家族のなかのある人をねたんでいます				5 10
12 <sub>21</sub>	ちょっとした旅行などで家を離れても、不安になり気持ちがおちつきません	42	22	+	45 35
15 <sub>1</sub>	家族の中には大変神経質なものがあります	33	44	+	35 35
15 <sub>2</sub>	家族の人のやったことで困ったことがあります	17	67	-	35 50 -
16 <sub>28</sub>	家の人がやっかいなことを引き起しても特別心配することはありません				0 0
18 <sub>4</sub>	私の家庭はふだん必要なものぐらひは間にあつています	92	100		75 100
18 <sub>6</sub>	家族の中にはおこりっぽい人がいます	25	44	+	45 45
18 <sub>17</sub>	家族の人達や近い親類の人たちは、皆仲よくやっています	100	89	+	95 75

(各項目への反応の姿は、このキリシタン村落の中に数年間の居所をもつての調査の結果と感覚から解釈される。この地域でのある反応の意味は他の地域でのものと逆に近い意味を示すこともある。)

来るものをもっている。

更に、次の夢に関する傾向は表10にみられるが、その全部の場面で宗教強に+の形が出ている。よく夢をみ、同じ夢を繰返し、悪夢でうなされ、夢で判断して方針をきめたりする方向を示している。これも anxiety にかかわるものである。夢その他の問題に関しては現在更に研究を進めつつある。

表 10

夢		+	-	+	-
		+	-	+	-
1 <sub>11</sub>	私たちは自分の夢を判断してそれで方針を決めたり、用心しなければならぬと思います	42	0	35	15
2 <sub>1</sub>	二三日に一度は悪夢でうなされます	25	0	20	5
9 <sub>1</sub>	一番心に残っていることをよく夢にみます	50	22	35	25
11 <sub>29</sub>	夢はほとんど見ません	17	22	25	35
15 <sub>6</sub>	私はよく夢をみます	58	22	55	25
19 <sub>6</sub>	時々同じ夢を何度もくり返してみます	17	0	20	5

以上の如き MMPI の結果を中心にして、考えると、宗教強の人々は、Hs Hy Pt Sc の方向で強く、anxiety の度合も強いとともに、普通抽象的に考える場合と異つて、非常に社会的な方向が強く社会的に宗教的であること、神経質な心配性な社会的な方向の強い人々であることが出てまいります。

勿論これらの性質は数年間のキリシタン・カトリック地域での人々との付合いや行動の姿の観察とともに考えられている。ある人々はこのようであり、ある人々はもう少しのんびりしているようでもある。interview の間に、この側面の観察もつづけられている。

このような結果にもとづき、また内調整をその中心的メカニズムとしてもつ宗教現象自体の性格を考える場合、宗教的地域集団の中で、宗教的なものを真に支えている人達は、より神経質な心配性な人達ではないかとい

う仮説を私は考えるのである。そして更に、宗教的統合の情緒的な色調は神経質心配性、不安というような方向の cultural mentality の色合いをもつたもの、不安と consistent な cultural mentality の色合いと tone をもつものではないかということを考えるのである。

外向的な人々も、その地に生れればカトリックまたはキリシタンになるが、その人々は習慣的に宗教的な人々になる形が多いと考えるのである。外向的な人々も大きな宗教的役割りを演ずる場合はあろう。しかし宗教的なものと最も consistent な人々はこのような神経質な心配性な人々であると考えるのである。

不安の顕在化が宗教集団を vitalize することが考えられる。迫害の故にキリシタンの信仰が強められ持続して来たこともこの場合事実である。

なお、人間集団に不安は必須である。事実の前で自己を騙すことによつてのみ人間がそれを逃れうることも明確な事実である。

### 3

次に frustration 場面での aggression の方向の問題に言及する。

宗教的地域集団は小数集団として、周辺からいじめられ区別されていても、単なる宗教なき被差別集団、小数集団と異つて aggression を外に向けるとのなさを、その比較的な弱さをもっているということに関係する。宗教なき小数集団、所謂部落などにある人格構造の外への aggression の強さが宗教集団では弱い。あるいは見られないということである。勿論差別や迫害の性格、強度により、また宗教が十分に働いているかどうかによつても異り、宗教の性格によつても異なる。宗教集団は先に述べた如き anxiety と consistent もを含みながらも、このような aggression を外に向けない性格をももっているようであるということに関係する。

キリシタン・カトリック村落黒崎の人々は檜山、黒崎、大野と一つの地

域地帯を構成しているが、少し大きくみれば小数集団である。それにもかかわらず、ここの人々は消極的ということとともに、おとなしく、穏やかで、真面目で、人がよいと多くの人々からいわれている。その事は数年間、この村に住居をもつて私どもも強く感ずるところである。この村に転勤して来る先生方が口を揃えていう処でもある。これは黒崎の人々を全体的に色づけている伝統である。処で、このおとなしきの姿は宗教にとつて枝葉末節の問題ではなくて、宗教現象の中核にかかわる問題であると考えている。特にキリスト教的なものの中核にかかわるものと考えている。キリスト教的なもの、宗教的なものにおける tenderness の問題に関係する。Eysenck や Ferguson などの宗教の軸と tenderness の軸の近さもこれ(註7)に関係している。

宗教的人格におけるこの局面の姿については私自身もいくつかの研究を進めている。

例えば刺戟語、柔かい、深い、静かな等の形容詞への free association において、一般人、非宗教的な人達が自然的な物の柔かさ、深さ、静かさの方向に流れていくのに対して、牧師群、神父群、神職群等の宗教的人格群の場合には、反応は強く内側のもの、inner な方向、心の柔かさ、人柄の柔和さ、心の深さ、心の中の静けさなどの方向に流れていく。このような事例にも宗教的な人格における inner なもの、心の姿、心の柔和へのかたよりの方向が現れている。人柄の柔かさ深さへの方向が示されている。

宗教的人格において、心の柔かさ人柄の柔かさの方向は重要な方向として捉えられて来た。

神経質、不安のような方向をもちつつ、おとなしき、柔かさが云々される姿について、キリシタン・カトリック地域である黒崎の在り方をみていってみようとする。

具体的方法としては、蒐集した作文、free association の分析、interview, picture frustration test, M. M. P. I. その他の結果を使用する。

ここでは picture frustration test の結果を中心に敘述する。先づここでも、山を背に海に対して並んだ、他の条件が大体会一で宗教に関してのみ異なる三村、三重、黒崎、神浦の姿を対比する。その異りは宗教に基づくと考えられる。更にこの三者の条件を整一にする為に、その村落に定着している pattern の姿を反映するとともに、テストにも比較的よく反応しうると考えられる中学一年生各約100名を、同じ条件で取り扱う。更に五島中通島奈良尾町でも、奈良尾中学及び岩瀬浦中学で同じテストを同学年の生徒各約百名にについて行う。ここでは各学校毎にキリシタン・カトリック部落と非キリシタン・カトリック部落の対比の形で分析する。

先づ黒崎地域を観察する。ここは西北九州のキリシタン・カトリック諸地域の中で、キリシタン・カトリック的なものが人格構造にまでしみだす度合は決して強い方ではない。作文の分析を通してみると、カトリック的なものが学校での作文「私の希望」にしみだしている度合は、馬渡島新村で最も強く、浦上本原地区がこれに次ぐ。平戸の紐差、黒崎がこれに続く。黒崎は西北九州のカトリック地域集団の中で、カトリック的なものの人格構造へのしみだしの度合はむしろ弱い地域である。しかしこの黒崎の P.F. にも外罰的な方向の弱さがみられる。馬渡の場合には、この傾向はもっとはげしく現われると考えられる。

この picture frustration test は Rosenzweig が抑圧に関する実験的研究を進めている間に取り出されて来た projective test であるが、24の絵の場面を使用する。日本版児童用を用いる。絵として適当ではないもの更に加えるべきものもあるが、不便とともに便宜もあるので既成のものを使用する。intropunitive, I, extrapunitive, E, impunitive, M, の分析断面でほどいていく。勿論分析は私の研究目的の方向でなされる。この24の場面はすべて対人関係場面であるが、私の写真を用いての TAT 風テスト結果で、個が一人の場面、人のいない場面で宗教的なものはより強く出ているのでこの絵の使用に問題が存しはする。

30 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

この分析は E, E', e, I, I', i, M, M', m とこれらの組合せの形でなされていくが、それは、frustrate している時に、aggression を自分の外にむけるか、困難はないのだと消す方向で動くか、自分が悪かったと自分の中に攻撃をむけるかの方向に関係する。24の絵の場面でどの方向をどれだけとるかで、その姿を計算しようとするものである。

		表 11			
		E	I	M	N
三重 (非キリシタン・カトリック村落)					
Data	No. 1-50 m	53.92	25.76	20.36	50
"	51-86 m	58.23	19.03	18.91	34
"	1-86 m	56.80	23.39	19.77	84
神浦 (非キリシタンカトリック村落)					
Data	No. 1-50 m	54.44	25.90	19.60	50
"	51-83 m	50.23	28.51	21.24	33
"	1-83 m	52.77	26.93	20.25	83
黒崎 (キリシタン・カトリック村落)					
Data	No. 1-50 m	43.32	32.24	24.40	50
"	51-100 m	44.94	29.86	25.48	50
"	1-100 m	44.13	31.05	24.94	100
岩瀬浦					
	カトリック m	43.80	27.30	27.86	36
	非カトリック m	51.48	26.66	20.90	42
奈良尾					
	カトリック m	45.82	29.82	24.52	23
	非カトリック m	49.71	27.17	23.85	94

三重, 黒崎, 神浦の姿は表11の如くである。

黒崎の両側にある, 非キリシタン・カトリック村落, 三重, 神浦は類似した姿を示している。三重では, DataNo1-DataNo50 で, E, extrapunitive 外罰的な方向のもの (EE'eE) 53.29%に対して, I, intropunitive 内罰的な方向 25.76%, impunitive 無罰的な方向 20.36%, DataNo51-DataNo86 では, Eの方向 58.23%, I 19.03, M 18.91, 全体 DataNo1-86 では E 56.80 である。逆側の隣, 神浦では Data No1-50 で E 54.44, I 25.90, M 19.60, Data No51-83 で, E 50.23, I 28.51, M 21.14, 全体 Data No1-83 では E 52.77 である。このような仏教村落の姿に対し, 両者に挟まれているキリシタン・カトリック村落黒崎では DataNo1-50 で, E 43.32, I 32.24, M 24.40, DataNo51-100 で E 44.94, I 29.86, M 25.48, 全体 DataNo1-100 で, E 44.13, I 31.05, M 24.94 である。この両隣の類似とキリシタン・カトリック村落のこの extrapunitive な反応の少なさの姿は, この人々が frustration 場面で extrapunitive な方向のなさをもつこと, 外に aggression をむけない方向をもっていることを示している。この三者はキリシタン・カトリックという点だけで異なるので, この因子がこの姿を示させていると考えられるわけである。ただそれが intropunitive な方向に流れるか impunitive な方向に流れるかについては明確ではない。

処で, これと同じ姿は五島中通島の奈良尾中学及び岩瀬浦中学でもみられる。

上五島中通島は非常に興味深い地域である。ここは五島, 青方, 平戸三つの勢力が錯綜した処である。青方は後に五島家臣団に入り, さらに富江藩に入る, その島の西北部は平戸, 五島の二方領であり, 若松町, 桐など奈良尾の西側は平戸の四分一領であり, 富江領である。桐, 昼浦, 大浦は富江領に属し, 岩瀬浦には五島の代官所があり, 福見は大村領からの人々であり, 奈良尾の人々の中心は和歌山県からの人々である。



奈良尾町岩瀬浦中学の場合は、福見、浜串、大浦の各部落がカトリック部落であり、岩瀬浦一区、二区及び須崎が仏教部落である。奈良尾町奈良尾中学の場合は、小奈良尾、奈良尾が仏教部落であり、桐、昼浦、高井旅にカトリック部落がみられる。高井旅は昭和27年頃キリシタンからカトリックになり、桐古里には現在キリシタンもいる。これらの各部落はそれぞれに比較的高い文化的独立性をもっている。通婚も勿論宗教内婚であり、カトリック諸部落と非カトリック諸部落の間はくぎられている。

各中学で黒崎地域と同じ一年をとる。岩瀬浦中学一年の場合は、カトリック N36名、非カトリック N42名である。それらの PF の結果は表11の如くである。非カトリック岩瀬浦一区二区及び須崎からの生徒の平均は E 51.48 I 26.66 M 20.90 で三重、神浦の場合に類似し、カトリック部落浜串、大浦、福見からの生徒の平均値は E 43.80 I 27.30 M 27.86 と黒崎の結果に近い。なお、その姿を各個人についてみても、カトリックの場合には E40%以下のものが、36人中17人と約半数であるに対して、非カトリックの場合には42人中7人と $\frac{1}{6}$ にすぎない。

以上の結果は、ここでもカトリックが aggression を外にむける傾向の弱いことを示している。

奈良尾町奈良尾中学での場合も表11の如くである。この場合は非カトリックの数は多く94名であるが、その平均は E 49.71, I 27.19, M 23.85 である。これに対しカトリック部落からの生徒は23名と少いが、その平均は E 45.82, I 29.82, M 24.52 である。今まで述べて来た中では差は最も少いが、やはり同様の姿を示している。

キリシタン・カトリックの文化の中で frustration 場面での外への aggression は弱いことが主張されうらと思う。

なお、次に、この奈良尾町内における各部落間の PF の異りの姿を観察していく。福見の場合、Eはカトリックの中で比較的高い。福見が非カトリック村落奈良尾本町と直接接していることによると考えている。高井旅

の場合も同様である。この部落には教会はあるが神父は常駐していない。このことは黒崎地域で東樫山の場合にもみられる。この地も非カトリック村落三重本村に直接接している。ここはキリシタン部落であり、この部落に教会はない。

discrimination への反発と、集団的な文化的価値や感覚を展開するのに必要な isolation の度合の弱いことが働いていると考えられる。

処で、この外への aggression のなさは、先にも述べた如く、おとなしき、真面目さ、消極的、人のよさとして、転動して来る先生方がみな指摘する処であり、数年間にわたるここでの吾々の接触でも明かな処である。

このような pattern の存在は何に基いているだろうか。

これは16世紀からづつこの黒崎地域に存して来たキリシタン・カトリシズムそのものによるというのが私の見解である。ここにキリシタンの入つたのは1565年港が横瀬浦から福田に移つた折りのことであると考えられる。勿論当時の改宗は集団改宗であり、地域改宗である。それ以後400年にわたる宗教の定着支配の結果であると考えている。

ここで問題なのは、この姿が主としてキリシタン・カトリシズムそのものに基くのか。それにもとづく迫害と差別に基くのかということである。迫害と差別だけに基く場合は、普通部落などにおける如く外への aggression はたかまるはずである。

この問題について、このようなことを反省しうる人々への interview の結果の若干を先づ記述する。外部に出たことのある個人はその異りを知りうる。

A、黒崎に生れ育つたが、大工として馬渡島の教会の建築に参加し、馬渡の人と結婚、三十年間馬渡にいて現在は福岡市塩原にいるAは、福岡の教会も五島の人が多いが余り黒崎と違わないという。佐賀の薬売りが馬渡に来た折り、非カトリック部落本村とカトリック部落新村とは人間の出来が違うとよくいうが、新村の人々は本村と全く違ふとカトリック村落の人

格構造の異りを指摘しつつ、黒崎の人々のおとなしき、素直さについて「先祖代々からの親のしつけ、宗教のしつけがしみ通っているからだと思う」「愛の観念があるからでしょう」という。

T. かつて永らく長崎、名古屋に出ており現在キリシタン集団の帳方である彼は「この人はよその人からすると人間がおとなしい。おとなしく、真面目、人間はよかですな。気分がそれだけ太かでない」「昔から伝統的におとなしかった。横着をするものもいるが、一体にはおとなしい。昔しからのなんじやから、宗教的に性質がおとなしくなってきたとです。昔からづつとですから」という。

H. 古河工業が鉱道を三重からか黒崎からかの決定の際、宗教の関係で黒崎の方がおとなしい故黒崎にしたなどの事例をあげ、宗教が原因との考え方をとる。

M. 肥前領の故であるとする。肥前深掘領はこのキリシタンの中心をなして来た処であることは事実であるが、しかし、大村領も現在カトリックであるので、江戸期には当然キリシタンであったと考えられる。大村領の現存キリシタリの数も少くはない。

K. 潜伏時代の名残りとの考え方を述べる。

以上はこの地の人々の思考である。十分に考え得る人々を、考える条件に導きながら取り出したものではあるが、subjective な資料であり、限界をもっているものである。

次に、私がキリシタン・カトリズムそのものによるとの考え方をとる根拠について、更に述べていく。

この外への aggression のなさ、おとなしさは一つの complex pattern を構成しているものである。それはおとなしさ、穏かさ、人のよさ、純朴さなどをも含んでいる。このような因子の共存は、このおとなしさの主たる原因が迫害や差別によるものでないことを示している。迫害や差別因子が強いと、おだやかさ、のどかさはむしろ減少するはずである。したがっ

てこの特性は長いキリシタン・カトリック的伝統の中に生じたものと考えるのである。

第二の主張点は理論的なものである。それは宗教現象のメカニズムの最も中心的なものとしての内調整のメカニズムの思考の上になつて考えられるものである。この内調整のメカニズムの存在については既に多くの研究を発表して来ている。この内調整のメカニズムの存在は、外に向けられる aggression の少なさを結果すると考えられる。この宗教的メカニズムの故に、外への aggression は弱くなると考えられるのである。

勿論歴史的な事象は一つの要因によつて決定されるものではない。むしろ無数の因子によつて規定される。したがって迫害や差別も大きな要因として働いてはいるが、中心的なものとしては宗教現象の中心的機能としての内調整 inner adjustment のメカニズムによると考えるのである。

そこでキリシタン・カトリックの宗教的統合の性格の中心に extrapunitive でない方向のもの、aggression を外にむけない方向の存在、なくするか内にむける方向の存在を主張するのである。永い強い宗教の支配の中に、このような方向が養われ、保持されていると考えるのである。

この場面での姿は、先の神経質、心配性の姿とかかわって来る。キリシタン・カトリック的なものは不安の要素、心配性、神経質な因子をより多く含みながら、しかも aggression を外に向ける傾向が弱く、おとなしく、真面目な穏かな、人のよい形を示すのである。

宗教的なものを支える人々は心配性な神経質な人々であり、この文化はその色合いを帯び、カトリックの非行をも含みながら、しかも aggression を外に向けない pattern を全体としては維持し伝達する。宗教文化、キリシタン・カトリック的的文化はこのような方向をもつ文化である。

なお、迫害の存在の故にキリシタンの信仰が持続して来たことも事実である。不安の存在がキリシタンの信仰の存在を堅めて来たことも事実である。しかしこの不安の中の人々が、外に aggression を向けない pattern

36 キリシタン・カトリック村落の religious cultural mentality の研究

を維持し展開して来たことも事実である。これが宗教現象のメカニズムでもある。これらは現在の結果であって次の研究の仮説である。

このような結果を、さらに細かに捉えていく実験的研究の design が思考されている。

- 註1 野村：キリシタンカトリック村落黒崎の土地所有及び戸籍について：哲学年報29輯
- 2 野村：長崎県黒崎におけるキリシタンのオラシヨ：哲学年報28輯
- 3 野村：馬渡島集団カトリックの研究：哲学年報24輯
- 4 野村：キリシタンカトリック村落黒崎の土地所有及び戸籍について
- 5 野村：宗教的人格の研究，野村：宗教現象の theory 構成への一段階：哲学年報23輯，Brow D. G. & Lowe W. L. “religious beliefs and personality characteristics of college students” J. soc. psychol, 1951, 33 33, 103-109.
- 6 野村：宗教的人格の研究
- 7 Argyle: religious behavior, 87-92.